

中国語の語気副詞“反正”の文法化と主観化

The Grammarization and Subjectivization of Modal Adverb “*Fanzheng*”

孟 醒
MENG, Xing

摘要

This article mainly explores the grammaticalization and subjectivization of the modality adverb “*fanzheng*(反正)” in modern Chinese, and analyzes the reasons for its continuous evolution.

First, from the diachronic perspective, the modal adverb “*fanzheng*” is not the product of word-formation mechanisms. It first appeared in the Song Dynasty as a coordinate phrase which expressed ‘negative (*fan*)’ and ‘positive (*zheng*)’. Later, under the mechanism of metaphor, “*fanzheng*” was used very frequently to express abstract meaning. The boundary between “*fan*” and “*zheng*” disappeared, moreover, “*fanzheng*” became a dvandva compound in this transmutation. During the process of lexicalization, “*fanzheng*” was influenced by “*zaowan*(早晚)” and “*sihuo*(死活)”, which were composed of two antonymous adjectival morphemes and grammaticalized to modal adverb, and it finally grammaticized by analogy mechanism in the Qing Dynasty.

From the synchronic perspective, the usage of modal adverb “*fanzheng*” in modern Chinese can be divided into two types. One is as a clause-internal adverb, which has narrow scope; the other is used as a sentential adverb, with the scope gradually extending to the whole sentence. In the second usage, we found that “*fanzheng*” is phonologically independent and its textual function is enhanced, which has the function of connecting a previous sentence. With these features, “*fanzheng*” becomes a discourse marker at the conversation level, for showing speaker's attitude, expressing the speaker's subjective conclusions. The speakers use the discourse marker “*fanzheng*” to facilitate the listener to understand their intentions immediately and interact with them. Furthermore, the discourse marker “*fanzheng*” usually appears in uncertain contexts. In these contexts, “*fanzheng*” appears frequently and is used as a filler, reflecting that the speaker is thinking and has not complete the speech. From modal adverb to discourse marker to filler, each stage of “*fanzheng*” is a case of grammaticalization and subjectification (including intersubjectification).

キーワード：“反正” 文法化 主観化 語気副詞 フィラー

Keywords: “*fanzheng*” grammarization subjectivization modal adverb filler

1. はじめに

現代中国語における語気副詞“反正”について、《现代汉语八百词》(増訂本)には、以下のような解釈と例が見られる。

a. どのような状況の下であっても、結論または結果が変わらないことを強調する。

(1) 信不信由你，反正我不信。

[信じるか信じないかはあなたの自由だ。いずれにせよ私は信じないけどね。]

b. 状況または原因を示す。語気が強い。

(2) 反正不远，咱们就走着去吧！

[遠くないのだから、私たちは歩いて行こう。]

(《现代汉语八百词》(增订本) 1999: 199 体裁は引用者による)

先行研究では、“反正”が現れる前後の文脈の意味関係・論理関係をめぐって、そのコンテキスト機能について分析しているものが多い(宗守云・高晓霞 1999; 王瑶 2018 など)。また、竇亚晶(2009)は談話分析の視点から、北京語で談話標識として用いられる“反正”の使用状況について考察を行っており、次の例(3)が挙げられている。

(3) 我们街道也不行，街道房子也紧张。就这样儿，没别的。反正，就是说，反正，反正，你就单位来说，反正也是，反正现在是普遍吧。都是反正房子是挺紧张的。

(竇亚晶 2009: 18)

[私たちの街(の状況)も良くないのよ。街の家も不足している。そうなのよ、他にないのよ。とにかく、つまり、ええと…職場の状況を考えると、まあ、これは今では普通のことだね。とにかく、どこでも家が不足している状態なのよ。]⁽¹⁾

例(3)で頻出している“反正”の用法は《现代汉语八百词》で記述されている語気副詞の用法と異なり、フィラー⁽²⁾的な使い方である。このような“反正”は語気副詞より更に文法化し、主観性・相互主観性の度合いが高まっていると言える。

一方、語気副詞“反正”の由来について、通時的な観点から検討している先行研究も見られるものの、統一的な見解は未だ示されていない。そのうち、“反正”は文法化を経て形成されたものであるという指摘(张谊生 2004 など)と、“反正”は語彙化、文法化のプロセスがなく、語の構成法に従って形成されたものであるという主張(董正存 2008 など)が見られる。こうした情況に鑑み、通時的考察な観点から、語気副詞“反正”が形成されるプロセスを再検討する必要があると言える。

本稿は“反正”の文法化と主観化のプロセスを究明することを目的とする。具体的には、まず歴史的考察を行い、語気副詞“反正”の由来を再検討する。その上で、コーパスから収集した共時的な例を分析しながら、“反正”の語気副詞、談話標識及びフィラー的な用法を明らかにし、フィラー的な用法まで変化してきた動因について分析を試みる。

2. “反正”が形成されるプロセス

“反正”は、歴史的には動目構造の「正に反する」という意味で用いられていたという(董正存 2008: 13; 刘善涛・李敏 2010: 43)。上古中国語(~3世紀頃)では、“反正”は動詞の“反”と名詞である“正”を組み合わせた表現であり、一語ではないことが指摘されている。

(4) 故文，反正为乏。(《春秋左传·宣公十五年》763)

[故に曰く、正を左右反転して乏となる。]

(5) 方直不曲谓之正，反正为邪。(《新书·道术》303)

[正しく素直で、曲がないというのは正であり、正に反して邪となる。]

上の2例では、“反”は「反する」を含意する動詞として用いられている。“正”は、例(4)では、「正」という文字を指すのに対し、例(5)では、「正義」という意味を表す。

その後、“反”と“正”が一緒に使用される頻度が高くなり、「正常に復する」という実義を有する動詞として定着するようになった。その時代に形成された“拨乱反正”“革邪反正”のような慣用表現は、現代にも残っている。

(6) 皇帝拨乱反正。(《汉纪·孝平皇帝纪》547)

[皇帝は混乱をしずめて、正常な秩序を取り戻した。]

(7) 荡汰积埃，革邪反正。(《抱朴子·勸学》110)

[詰まった埃を洗い流し、邪を取り除き、正を取り戻す。]

一方、“反正”が“正反对立”[正と反が対立する]という意味で用いられるフレーズの使用は《文心雕龙》(501~502年)において初めて見られる(董正存 2008: 13)。

(8) 又以事对，各有反正。(《文心雕龙·丽辞》385)

[また、典故で対句をつけるにも、正も反もある。]

この文の前には、“言对为易，事对为难，反对为优，正对为劣”[言で対を作るのは易しいが、事で対を作るのは難しい。反对から対を作るのは勝り、正面から対を作るのは劣る]とある。その中では、“反”と“正”はそれぞれ単独で使われているため、例(8)における“反正”は前方の“反对”“正对”を指し、その間の関係が緊密ではないことから、一語として成り立ってはいないと考えられる。

その後、宋の時代(960~1279年)に至るまで、相反する2つの形態素からなるフレーズとしての“反正”が使用される例は見られない。次の例では、“反正”は「反面、正面」という意味で、並列フレーズとして用いられている。

(9) 于夏之日，冬之夜，未尝不挥毫染素，乃至千百幅，反正无下笔之所，方可舍诸多。(《说文偏旁字源目录·序》；《汉语大词典2》：857)

[夏の昼であれ、冬の夜であれ、筆を揮って書画を書く。その数は千百もあり、絹の正反両面ともに染めていないところがなくなってから、それを捨てることにしている。]

(10) 反正备论养字之义，文亦四变，又短中搀长，皆惧其律也。(《罗氏识遗·奇崛可味》；雷冬平 2006: 61)

[正反両面から養という字の意味を詳しく論じており、文(の長さ)も変化し、短文に長文が入混じり、それぞれ韻律を持っている。]

例(9)では、“反正”は実物の“素”[絹]の正反両面を指し、節の主語となっている。例(10)

では、“反正”は事の正反両面（文脈から、「事の良し悪しの二面」であると考えられる⁽³⁾）を指し、状語の位置に置かれている。この2例を比べてみると、例（10）における“反正”はすでに客観的な事物を指さず、状語として使用されている。

更に清の時代になると、対立する2つの形態素から構成された“反正”の使用が多く見られるようになった。特に例（11）のように、“反正”が“虚实”と同時に使用される例が多く現れていた。

（11）将文章按在桌上，拿笔点着，从头至尾，讲了许多虚实反正、吞吐含蓄之法与他。

（《儒林外史・十五回》170）

[文章を机の上に押しえつけて、筆で示しながら、最初から最後まで、虚实正反、含蓄など、いろいろと彼に教えた。]

ここでは、“反正”は“虚实”と併用され、更に“虚实反正”は“吞吐含蓄”と並べて用いられ、文章作法の定語となっている。ここでの“反正”は、意味的にも近い語“虚实”と共に用いられていることから、すでに一語として扱われていると考えられる（詳細は3.1で考察する）。更に、

（12）石性粗松不佳，其纹俨然菊花，故名。斜侧反正悉备，亦有致趣。

（《竹叶亭杂记・卷八》；雷冬平 2006：61）

[(その)石はきめが粗くて脆く、質も良くないが、その模様はまるで菊の花のようであることから、この名がつけられた。横斜めにも両面にもこの模様がついている点も、趣がある。]

例（12）では、“反正”は“斜側”と共起し、合わせて石の「全方向」を指している。雷冬平（2006：61）によると、例（12）における“反正”は「すべての状況の下であっても、結果が変わらない」ことを表す語気副詞“反正”と繋がっているとされる。

そして、清の末期、20世紀の初頭には、“反正”は語気副詞として用いられる例が見られ、やがて頻繁に使用されるようになった（太田辰夫 2004：251；张谊生 2004：340）。

（13）便叹口气道：“别说乐，倒惹了一肚子的气！你何苦再带酸味儿？这里反正没外人，你坐着陪我吃吧！”（《孽海花・第27回》；张谊生 2004：340）

[彼はため息をついて言った。「喜ぶどころか、かえって腹が立ったよ！やきもちを焼く必要はないでしょ？とにかくここには部外者もいないし、座って食べるのに付き添って！」]

（14）又说道：“嗨！不要紧，反正我失落了文书也回不去了，你两个人也不必寻死，这场官司我替你们打了……”（《康熙侠义传（上）・第十七回》80）

[更にこう言った。「まあ！大丈夫だよ。どうせ私は書類を失くして帰れないから、あなた達2人は死を求める必要はない。この訴訟は私があなた達2人の代わりにやっつけてあげる。」]

上の2例から分かるように、この時期にはすでに“反正”は「正反両面」という実義から話し

手の主観的態度を表す副詞となり、現代中国語における語気副詞“反正”と同様の使い方で用いられている。例(13)のように述語の前に置かれる以外に、更に例(14)のように、主語の前に置かれることもある。

3. 副詞“反正”の語彙化と文法化

刘善涛・李敏(2010:44)、张渊(2016:49)は、“反正”は動詞から名詞を經由し、副詞へと文法化してきたと主張している。その一方で、雷冬平(2006:61)は、宋代に見られた、方向を指す“反正”というフレーズが副詞“反正”へと文法化したと指摘している。2節で通時的考察を通して“反正”の品詞変化を分析したところ、雷冬平(2006)の指摘は妥当な見解であると思われる。動詞“反正”と名詞“反正”の間にある並列フレーズの段階も研究の範疇とし、本稿では雷冬平(2006)を踏まえつつ考察を進める。

本節では、通時的な例を援用しつつ、語気副詞“反正”が形成されるメカニズム、及びその背後にある動機づけを解明する。具体的には、“反正”が並列複合語(dvandva compound)に語彙化されるプロセスと、語気副詞へと文法化するメカニズムの2つの部分に分けて議論を進める。

3.1. 並列複合語“反正”の形成

名詞性成分が並列されてフレーズとなる際には、無標形式(“意合”)と有標形式(“形合”)の2種類が見られる。例えば、“反正”は無標形式であるのに対し、“反、正”或いは“反与正”は有標形式となる。言語形式と意味の関係において、形式と意味は何らかの関連性があるという言語の性質を類像性(iconicity)⁽⁴⁾という。また、類像性の原則の1つとして、距離上の類像性(distance iconicity)が指摘されている。Haiman(1983:782)によれば、表現間の言語上の距離はそれらの概念上の距離に対応する(The linguistic distance between expressions corresponds to the conceptual distance between them)。“反”と“正”は意味が対立するものの、同様な上位概念⁽⁵⁾一空間を有するため、無標形式で結合することができる。しかし、董秀芳(2011:110)が指摘するように、全ての無標形式の並列フレーズが語彙化されうるわけではない。そこで、“反正”が並列フレーズから並列複合語へ語彙化される背後にある動因を探る必要が生じる。

“反”と“正”は名詞として併用されていた当初、指示的な(referential)対象を有し、客観的な物の空間方向を指していた(例(9))。客観的な物の“反面”と“正面”にははっきりとした境界が存在することから、距離上の類像性から考えると、言語形式としての“反正”は“反”と“正”の間にもはっきりとした境界が存在すると予測できる。指示的な対象を持つ“反”と“正”は分離性が高く、語彙化されにくいため、フレーズとして用いられていたのである。

一方、“反正”は客観的な物の二面を指す以外にも、事態の二面を指すこともできる。この中

では、メタファーによる比喩的拡張が関わっていると考えられる。ここでは、例(15)を用いて説明を試みる。

(15) 反正 备论养字之义，文亦四变，又短中换长，皆惧其律也。(例(10)再掲)

前節で少し触れたが、ここでの“反正”は事態の「良し悪しの二面」という性質を指す。なぜなら、空間的概念を表す“反正”は「対立する」という点で、性質の「良し悪し」と強い連想関係を持っているからである。＜空間一質＞という抽象化の進行は Heine et al (1991:48) が提示するメタファー的意味拡張の傾向（以下のように示す）に合致する。

人 (person) > 対象物 (object) > 活動 (activity) > 空間 (space) > 時間 (time) > 質 (quality)

空間から性質へという意味拡張を経て、“反正”は意味の一般化 (generalization) と抽象化を獲得したのである。しかし、この場合の“反正”は意味が抽象化されたにもかかわらず、指示的な対象 (客観的事態) を有するという点では変わらず、“反正”が表す「対立性」は依然として残っている。それゆえ、ここでは、“反”と“正”の分離性の程度は高く、“反正”はまだ語彙化されておらず、並列フレーズとして用いられていると考えられる。

距離上の類像性という原則に従って、“反正”は並列フレーズから並列複合語へ語彙化される際に、“反”と“正”の間の境界が消失することが求められる。ここで例(16)における“反正”を例にして説明を試みる。

(16) 将文章按在桌上，拿笔点着，从头至尾，讲了许多虚实反正、吞吐含蓄之法与他。

(例(11)再掲)

前節で触れたように、ここでは、“反正”は“虚实”と無標形式で結合し、更に“吞吐含蓄”と併用され、有標形式を取っている。「無標形式が取られる場合、両者の分離性は小さく、意味上の差は強調されない」という董秀芳 (2011:107) の指摘から考えると、ここでの“反正”は“虚实”と意味上では類似性を有しているはずである。ここでの“反正”には指示的な対象が存在しておらず、非指示的 (non-referential) なものである。そのため、“反”と“正”は境界が不明確となり、意味が融合し、1つの並列複合語となったと言える。そして、語彙化された“反正”は意味が更に抽象化し、属性を指すものになった。これもまた、“反正”が“虚实”と無標形式で結ばれる前提となっている。

個別的、具体的なものより一般的、抽象的な語彙項目は文法化しやすいものとされている。語彙化及び意味の抽象化は“反正”が更に機能語に変化していく基礎となっている。

3. 2. 語気副詞までの文法化

ここでまず述べておきたいのは、並列フレーズから語気副詞へのプロセスは、“反正”の語彙化と文法化が別々に進んでいたわけではなく、同時に進行していることである。なぜなら、語彙化される前の段階で、並列フレーズの“反正”は状語として用いられていた。これは“反正”が副詞への品詞転換の起点となり、副詞機能の獲得の一環として欠かすことができないと考え

られるからである。つまり、状語の位置に置かれる“反正”は文脈的意味吸収により、主観性を獲得し、現在使用される語気副詞となったのである。

意味が対立する形態素からなる副詞には“反正”以外に、“早晚”[遅かれ早かれ]、“横竖”[いずれにせよ]、“死活”[どうしても]などが挙げられる。現代中国語では、このような“反素詞”は意味が抽象化しているため、置き換えられる場合があると孫嘉銘・石定栩(2021: 24)は指摘している。

(17) a. 他想问问有没有给他的信, 又意识到问也是白问, 反正学校那些人会转给他的。

[彼は自分宛の手紙があるかを尋ねたかったのだが、聞いても無駄だと気づいた。どうせ学校の人たちが手紙を渡してくれるのだから。]

b. 他想问问有没有给他的信, 又意识到问也是白问, 早晚学校那些人会转给他的。

[(同上)。遅かれ早かれ学校の人たちが手紙を渡してくれるのだから。]

(孫嘉銘・石定栩 2021: 24 体裁は引用者による)

上の2例では、“反正”と“早晚”には意味の相違が見られるものの、両者は話し手の主観的態度を表す語気副詞として機能上では類似しているため、置き換えることができる。更に、このような機能が類似している“反素詞”からは同様の文法化ルートが見られると張誼生(2004)は示唆している。張誼生(2004)の考察によると、“反素詞”の中で、「长短」(唐宋時代)、「左右」「好歹」(宋元時代)、「高低」「死活」「迟早」(明代)、「反正」(清代)の順で文法化が完了していることが窺える。

他の“反素詞”に比べて、語気副詞“反正”の形成が最も遅い理由として、動詞“反正”が各時代において頻繁に使用され、この用法が並列複合語“反正”の文法化を抑えていたからである。清の末期には、「敵が投降する」や「皇帝が復位する」という意味を持つ“反正”の使用頻度が減少し、同時に、語気副詞の用法が小説において散見され始め、その後、頻繁に使用されるようになった。これらの原因により語気副詞“反正”の出現と定着が促された。

また、唐宋時代から時間が経つにつれて、“反素詞”は次々と文法化し、語気副詞の機能を獲得した。類推のメカニズムで、“反素詞”に属する“反正”も語気副詞へと文法化した。“反素詞”の文法化をもたらす1つの要因は、それを構成する形態素が共通の特徴を有することであると張誼生(2004: 341)は指摘している。その特徴は以下のように述べられている。

几乎都是由成对的反义词(现已成为语素)构成的; 这些形容词大多是相对关系的极性反义词, 少数是绝对关系的互补反义词, 都可以构成一个完整的语义场; 其中的两个形容词(或语素)正好都处在一个语义场的两端或两面, 因而很容易被推向极端, 从而否定或概括整个义场。

[そのほとんどはペアとなる反義語(現在は形態素になっている)から構成される。これらの形容詞のほとんどは意味が対立する極性反義語であり、その中のいくつかは絶対関係の相補的な反義語で、いずれも完全な意味領域を形成しうる。その2つの形容詞(または形

態素) はちょうど1つの意味領域の両端または両側に配置されているため、極端な意味に押し寄せられ、意味領域全体を否定すること、或いは要約することになる傾向がある。](筆者訳)

“反素詞”は上述した認知的メカニズムによって、周遍義”[広く行き渡る意味]という主観的な意味が生み出されたのである。張誼生(2004)の指摘を踏まえて分析してみると、“早晚”のような“反素詞”は、段階的反義語によって構成されており、中間的段階が見られる。それに対し、“反正”を構成する“反”と“正”は相補的關係であり、その間には中間的な段階がなく、片方を否定すると他方になるという関係を持っている。両者が並列される場合、“早晚”類の“反素詞”よりは、「どのような状況の下であっても」という意味が生じやすいのである。つまり、この点は、“反正”が現代中国語において、「いずれにせよ」という意味で使用頻度の最も高い“反素詞”であることにも関係していると考えられる。

更に、現代中国語において、“早晚”は「朝晩」を意味し、“死活”は「存亡」を意味するように、“反素詞”は往々にして、内容語と機能語の用法を持っている。それに対し、“反正”は初めは実体の両面を指していたが、現在では内容語としては使用されなくなっている。これもまた、使用頻度が高いという点に繋がっていると言える。“反正”が頻繁に使用されることによって、さらに文法化する可能性が生じる。以下4節で詳しく論じる。

4. 現代中国語における語気副詞“反正”の用法の移行

冒頭で述べたように、現代中国語における“反正”は語気副詞である一方で、談話標識でもあると指摘されている。また、先行研究で挙げられている例の中には、“反正”のフィラーとしての側面も見られる。本節では“反正”の用法を語気副詞、談話標識、フィラーの3つに分け、それぞれの特徴を描写した上で、語気副詞からフィラーまでの派生経路を検討する。

4. 1. 語気副詞から談話標識へ

語気副詞“反正”に関する考察をまとめた先行研究では、主に“反正”の前後の文脈の論理関係をめぐって述べられている。例えば、宗守云・高晓霞(1999)は因果関係、条件関係、並列関係、解釈関係、順接関係及び逆接関係という6つの関係をまとめている。しかし、これらの論理関係は“反正”によって表出されたものでなく、“反正”が所在する構造の文法的意味が“反正”に帰したと考えられる⁽⁶⁾。本稿は文法化の度合いに基づいて、語気副詞“反正”を2つの用法に分ける。まず、用法1について分析する。

(18) 那你……把这一箱书……卖给我行不行? 反正你也不看。

(陈忠实《送你一束山楂花》 BCC)

[それなら、あなたは…その1箱の本を…私に売ってくれないか? どうせあなたは読ま

ないんだから。]

(19) 反正你不吃亏，你有什么不谅解的呢？（张恨水《金粉世家》 BCC）

[いずれにせよ、あなたは損をしないのに、どうして許せないの。]

例(18)における“反正”は、前に“因为”を補足しうるため、先行研究の中では、往々にして因果関係を示すものとして取り扱われている。それに対し、例(19)では、“反正”の前に“因为”を補足すると非文となる。この2例における“反正”を同様の用法と捉える理由は“反正”に共通的特徴が見られるからである。例(18)と例(19)では、“反正”にはストレスが置かれており、“反正”は後続する内容（波線で示す）の真実性に対する話し手の姿勢を表す。言い換えれば、“反正”によって話し手の強い主観的断定が表される。この場合、“反正”は“周遍義”を表し、往々にして“也”または“都”と共起する。例(18)では“也”が現れており、例(19)では述語“不吃亏”の前方に“也”或いは“都”を挿入しうる。“反正你也不吃亏”は“正着看你也不吃亏，反着看你也不吃亏”のように2つに分けられ、“也”は並列を表す。故に、この用法では、“反正”にはある程度実義が残されていると言える。また、当該用法の“反正”は“周遍義”を表すため、文脈によって、他の“反素詞”と置き換えられる。例えば、例(19)では、“反正”は“横竖”に置き換えられる。

また、話し手の発話意図を踏まえると、例(18)と例(19)では、質問文の箇所が話し手の一番伝えたいこととなる。逆に言えば、当該用法では、“反正”に後続する内容は話し手が一番伝えたいことではなく、“反正”が用いられている節（或いは文）を削除しても、発話の伝えたいことが損なわれることはない。換言すると、当該用法の“反正”に後続する内容は背景化し、発話の焦点とはならないのである。

更に、例(18)では、“反正”は単文で用いられており、そのスコープは文末までとなる。それに対して、例(19)では、“反正”は複文で現れるが、そのスコープは文全体に及ぶわけではなく、“反正”が所在する節末までである。このことから、“反正”にストレスが置かれる場合、そのスコープは節の限界を超えない傾向があると考察できよう。

一方、“反正”の用法2は、ストレス、焦点、スコープの側面で、異なる性質を表している。例(20)と例(21)を用いて説明する。

(20) 我不管你讨厌不讨厌，反正你不能玩枪。（阿待《枪惑》 BCC）

[あなたが嫌か嫌じゃないかにかかわらず、とにかくあなたは銃を弄ぶのはダメ。]

(21) 不管你是不是真拿我当意中人，反正我是看上你了，由此也就缠上你了，不管今后会发生什么，你是休想甩掉我。（王朔《给我顶住》 CCL）

[あなたが本当に私を意中の人と見なしているかどうかにかかわらず、とにかく、私はあなたが気に入ったから、これからあなたに付き纏うようにする。たとえ将来何が起ころうとも、あなたは私を振り捨てることを断念しなさい。]

例(20)と(21)において、“反正”にはストレスが置かれていない。また、“反正”に後続す

る内容（波線で示す）は発話の最も伝えたい部分であり、その中にはストレスが置かれる箇所が存在する。例えば、例（20）の後半では、節のストレスは“反正”ではなく、“不能”にあるのである。

また、用法1に比べると、用法2では、“反正”のスコープが広がる傾向が見られる⁽⁷⁾。特に例（21）では、“反正”の支配する部分は節を超え、文末までとなっている。また、例（20）と例（21）では、“反正”が前節の“不管”とセットとなり、“反正”には後に述べられる内容を前方文脈と結びつける機能が見られる。つまり、広いスコープを持つ用法2の“反正”は、副詞として節内における述語を修飾するより、前後の文脈を繋ぐという文脈形成的機能が著しくなる。当該用法の“反正”は往々にして話し手の主観的な結論を導き出し、意味上では“总之”に置き換えられる傾向が強い。

用法1と異なり、当該用法では、“反正”の後にポーズを入れることがあり、書面上では、例（22）のように、“，”の使用が見られる。更に、例（23）のように、“反正”に“啊”“呢”のような語気詞をつけることもできる。

(22) 原始森林，在贝加尔湖边，有多大？我不知道，反正，几天几夜走不到头。

（瓦西里耶夫《这里的黎明静悄悄》 BCC）

[原生林は、バイカル湖の湖岸にある。大きさはどれくらいかって？私は知らない。どうせ、昼夜を問わず何日歩いても行き着くところまで行けない。]

(23) 随便怎么说，反正呢，也不是我个人掏钱，搁在您的腰包里。（《编辑部的故事》 CCL）

[なんとでも言うがいい。とにかく、私個人で金を出して、あなたの財布に入れたわけではない。]

例（22）（23）における“反正”は、後方文脈との関係が用法1ほど緊密ではない。このような統語構造に緩やかに付加されて、ポーズを伴う“反正”が談話レベルにおいて、談話標識と変化していったと考えられる。4.2では談話標識“反正”の特徴を改めて記述する。

4. 2. 談話標識からフィラーへ

Schiffrin (1987) は談話標識をめぐって体系的な研究を行い、“I operationally define markers as sequentially dependent elements which bracket units of talk” [機能的な観点から談話標識を、談話単位を関連づける連続的に依存した要素と定義する] と述べている (Schiffrin1987: 31)。談話標識はかつて言われてきたような「意味のない」ものではなく、前後の文脈において、橋渡しする (create a bridge) 役割を果たしている (Schiffrin1987: 253)。語気副詞“反正”の用法2には主観的結論を示す機能が見られるが、談話レベルで、全ての語気副詞“反正”の用法2は談話標識ではない。以下例（24）（25）を用いて談話標識“反正”の特徴を列挙する。

(24) 昨晚我去采样，那些人连我的祖宗八代都骂遍了，反正今天我是不去通知他们检验结果，你说下大天来我也不去。（王朔《人莫予毒》 CCL）

[昨夜、私はサンプリング検査に行ったとき、あいつらは私の先祖たちを罵った。いずれにしても、今日私は彼らに検査結果を知らせには行かない。君がたとえどれだけ言っても、私は行かない。]

(25) 陈鲁豫：跟有艺术家气质的人在一起生活是比较累的。

梁静：反正，还行吧，习惯了。（《鲁豫有约》 MLC）

[陳魯豫：アーティストの気質を持つ人と一緒に暮らすのはわりと疲れますね。

梁静：まあ、まあまあです。もう慣れました。]

談話標識“反正”は話し言葉で用いられ、それが現れる発話には、例(24)のように前方文脈が背景に見られるものがある。例(24)では、“反正”に後続する“今天我是不去……”の部分は話し手の主観的な結論であり、“昨晚……”はその結論を出す際の背景となっている。音韻的視点から見れば、談話標識“反正”はストレスを担わず、例(25)のようにポーズを伴うこともできる。例(25)では、談話標識“反正”は発話の最初に現れ、話し手は“反正”を用いることで、話者交替(turn-talking)を実現しているだけでなく、円滑に自分の主観的結論を導き出すこともできた。談話標識の“反正”は命題の構成要素の外側に生じ、文の真偽値に関わらない。そのため、“反正”を取り除いても発話の自然さを保っている。談話標識の“反正”は命題内容に関わらず削除しうるが、例(20)～(23)で挙げた語気副詞の“反正”は削除できない。この点が談話標識の“反正”と語気副詞の“反正”との最も顕著な違いである。

談話標識の“反正”は談話機能的意味を持っており、話し手の認識によって得られた主観的な結論を導くマーカーであると同時に、「これから結論を話すので聞きなさい」という合図でもあり、聞き手の注意を引く機能を持っている。談話標識“反正”によって、聞き手が話し手の伝達意図を素早く理解することができるため、“反正”が表す相互主観性(intersubjectivity)⁽⁸⁾の度合いが高まった。文副詞(語気副詞の用法2)から談話標識へという変化のプロセスは、Traugott & Dasher(2002: 153)が指摘する認識の副詞の文法化、主観化ルート⁽⁹⁾と合致している。

命題の外側にある“反正”は、例(24)(25)のように、直接に結論を引き出すことができる以外に、結論と少し離れた前方で使用される文も多く見られる。

(26) 其实啊这李小龙要说他并不满足于开班授徒，他的目标还有点，反正这么说吧，他的目标是好莱坞。（《中国之声》 MLC）

[実は、ブルース・リーは、教室を開いて弟子を指導するところに満足していたわけではなくて、彼の目標は更にですね、ええと、こう言いましょう、彼の目標はハリウッドだったのです。]

(27) 小黄瓜在台湾也会吃，只是说不吃那么多，大葱基本上我们也很少，反正就是，我觉得从买菜上头，就有很大的不一样，然后做菜上头也不一样。（《缘分》 MLC）

[きゅうりは台湾でも食べますよ、ただそんなに多くは食べないけど。ネギは私たちは

基本的にあまり食べません。ええと、野菜を買うことに大きな違いがある。そして料理を作ることに違いがある。]

上の2例では、“反正”はそれぞれ概括を表す談話標識“这么说吧”と解釈を表す談話標識“就是”⁽¹⁰⁾の前に現れる。この場合、“反正”は他の談話標識と相俟って、結論を導き出す。このような“反正”は“嗯”[ええと]“那个”[あのう]のようなフィラーに置き換えることができるため、フィラー的な特徴を備えていると考えられる。更に、“这么说吧”“就是”より、“反正”と共に起る頻度の高い談話標識としては“怎么说呢”が挙げられる。

(28) 现在的孩子怎么说呢，反正你给他们多少钱，他们就能用多少啦。(《中国之声》 MLC)

[今の子はなんとはいいいでしょう。とにかく、彼らにどれだけお金を与えても、それを全部使ってしまうことができるのですよ。]

(29) 郑磊：反正怎么说呢，高考这种能够决定命运的重要考试，一些人通过这种舞弊的方式取胜，让人实在无法容忍。(《新闻天天谈》 MLC)

[鄭磊：とにかく、なんとはいいいだろう。大学入試のような、運命が決められる重要な試験を、不正行為で勝ちを取る人には本当に我慢ならない。]

“怎么说呢”は“迟疑功能话语标记”[ためらう気持ちを表す機能の談話標識](吕为光 2015)であり、“反正”と共に起る場合、例(28)(29)のような2つの位置関係が見られる。また、上の2例では、“反正”と“怎么说呢”のどちらかを取り除くことができる。そのため、ここでの“反正”は“迟疑功能”で“怎么说呢”に類似すると推測できる。“怎么说呢”の“迟疑功能”について、吕为光(2015: 89)では、“说话人在保持交际连贯性的基础上，用‘怎么说呢’延缓语流为自己争取更多的思考时间，组织自己的话语”[話し手は、コミュニケーションの一貫性を保つ上で、“怎么说呢”を用いることで、話のスピードを落とし、自分により多くの考慮する時間を獲得し、自分の言葉を整理する。]と述べられている。実際、談話標識の“反正”が用いられる発話には、話し手の考慮している痕跡がしばしば窺える。

(30) 记者：她们是业余的还是专业的？

郭先生：我说不清楚，反正每个周日，她们都在这儿演出。(《新闻热线》 MLC)

[記者：彼女たちはアマチュアですか、プロですか。]

郭さん：はっきりと言えませんが、毎週日曜日に、彼女たちはここで公演をします。]

(31) 陈鲁豫：他长得可怕吗？

乐乐：我也不知道。反正从小就怕他，他只要看我一眼，可能不用瞪我，我就害怕了。

(《鲁豫有约》 MLC)

[陳魯豫：彼の顔が恐ろしかったの？]

樂樂：私にも分かりません。とにかく、子供の頃から彼が怖かったのです。彼が私を一目見るだけで、睨みつけることがなくても、それだけで怖かったのです。]

例(30)(31)のように、談話標識“反正”は“说不清楚”“不知道”といった表現の後ろで用

いられる例が多く見られる。話し手は事態に対して十分に把握していないものの、自分なりの結論を出す際に、聞き手に解釈を示そうとする姿勢が“反正”によって表される。更に会話の中では、自分の話が途切れていないことを表すために、“反正”を多用する例も見られる。

(32) 有时候上岁数人和上岁数人一块呆着, 有时候说话什么的挺那什么的, 反正这也反正说话反正, 一个人反正我觉得反正从大体可能好象意思是一个人和一个人说话好象都不怎么太一样。(1982年北京话调查资料 CCL)

[ときに年を取った人と年を取った人が一緒にいたとき、ときどき話す時はちょっとあれだね、うーん…人が、ええと、大体、なんか、一人一人の言葉遣いがあまり同じではないみたい。]

例(32)のような“反正”が頻出する自然会話では、往々にして、最後の“反正”が典型的な談話標識であり、主観的な結論を導き出すものとなっている。一方、結論が明確に表出されるまでは、フィラーとしての“反正”は、“挺那什么的”のようなくだけた表現や“好像”“不清楚”のような不確定さを表す表現と共起して頻出する傾向がある。つまり、会話の中で見られるフィラー“反正”は、話し手の語りたい意欲を反映しながら聞き手を語りに引き込むもので、会話促進の機能を有する表現である。この点から言えば、フィラー“反正”には高い度合いの相互主観性が見られる。

5. おわりに

以上、“反正”について通時的かつ共時的考察を行い、“反正”の文法化と主観化の過程について究明を試みた。

本稿ではまず通時的視点から、“反正”は、「正面・反面」という実義を持つフレーズから抽象的な概念へと変化し、語彙化して並列複合語となったことを明らかにした。更に、“反正”は語彙化する過程において、“早晚”“死活”といった“反素詞”の影響を受け、類推のメカニズムによって、清の時代に文法化し、語気副詞としての用法が形成されたことについて指摘した。

共時的視点からみると、現代中国語における語気副詞“反正”は、節内で用いられる用法1と、スコープが節の限界を超える用法2に分けることができる。その中で、用法2の音韻的に独立している特徴や話し手の主観的な結論を表出する機能を有するなどの特徴によって、“反正”は談話標識へと変化した。更に、“反正”は不確定な状況で多く用いられ、話し手の思考する痕跡でありつつ、発話の中でフィラー的な特徴も見られるようになった。以上のことから、“反正”の語気副詞からフィラーまでの発展には主観性、相互主観性の増加を見て取れる。

注

- (1) 本稿では、フィラーとしての“反正”を訳すとき、「ええと」「うーん」などと訳す場合が多いが、“反正”が頻出する場合は訳さないこともある。
- (2) フィラーとは発話の一部分を埋める語句のこと。命題内容やほかの発話との接続関係などをフィラー自体は示さない。英語の *well, you know*、日本語では「ええと、あのー」などがフィラーとして挙げられる。
- (3) 当該用例の前に、“……以寡欲养心，以静养身……。……养盗以窃，养虎以贻害……”[欲を抑えることで心を養い、安らかな心で身を養う…泥棒を養うと盗まれてしまい、虎を養うと損を被ってしまう…]という内容がある。前半は良い方面で挙げられた事例であり、後半は悪い方面で挙げられたものである。
- (4) 類像性の詳細な研究については *Haiman (1980, 1983)* を参照。
- (5) 董秀芳 (2011: 105) は“上位概念的相同是反义形式并列的语义根据”[上位概念の同一性は対義形式が並列しうる意味的基礎となる]と述べている。“长”と“窄”が反義語にならない理由は、両者の上位概念が異なるからである。
- (6) 马真 (2011: 108) は“要特别小心别将虚词所在的格式的语法意义归到那虚词的身上”[機能語が存する形式の文法的意味をその機能語にまとめないように注意すべきである]と指し示している。
- (7) 本節での語気副詞“反正”のスコープについての分析からみると、用法2は用法1より文法化が進んでいると言える。しかし、本稿では、この2用法を平行する用法として捉えることにする。その理由は、通時的考察では、語気副詞“反正”が形成された清の末期では、この2つの用法がいずれも見られ、用法2は用法1から文法化してきた証拠が欠けているからである。
- (8) 相互主観性は間主観性或いは共同主観性とも言われ、「話し手(書き手)が聞き手(読み手)の「自己」へ向けた注意が明確に表現されること (*Traugott 2003: 128*) と定義している。
- (9) *Traugott & Dasher (2002: 153)* では、認識の副詞には「節内の副詞 (*clause-internal adverb*) > 文副詞 (*sentential adverb*) > 談話標識 (*discourse mark*)」の用法変化が見られると指摘されている。更に、「非主観的>主観的>相互主観的」という文法化、主観化の一方仮説が提示されている。
- (10) 談話標識“这么说吧”と“就是”は曹爽 (2015)、窦亚晶 (2009) を参照。

用例出典

《春秋左传》，楊伯峻編著《春秋左傳注》(修订本)，北京：中華書局，1990年。

《新书》，閻振益、鐘夏校注《新書校注》，北京：中華書局，2000年。

《汉纪》，張烈點校《兩漢紀》，北京：中華書局，2017年。

《抱朴子》，張松輝、張景譯注《抱朴子外篇》，北京：中華書局，2013年。

《文心雕龙》，周振甫注《文心雕龙注释》，北京：人民文学出版社，1981年。

《儒林外史》，吳敬梓著，張慧劍校注，北京：人民文学出版社，2002年。

《康熙侠义传》(上)，(清)貪夢道人著，北京：中国文史出版社，2003年。

参考文献

曹爽 2015. <话语解释标记“这么说吧”>，《广西师范大学学报：哲学社会科学版》第5期，pp.126-131.

董秀芳 2007.<词汇化与话语标记的形成>，《世界汉语教学》第1期，pp.50-61.

董秀芳 2011.《词汇化：汉语双音词的衍生和发展》(修订本)，商务印书馆。

- 董正存 2008.〈情态副词“反正”的用法及相关问题研究〉,《语文研究》第2期, pp.12-22。
- 窦亚晶 2009.《北京话话语标记语“就是”“反正”研究》,北京语言大学硕士学位论文。
- 雷冬平 2006.《近代汉语常用双音虚词演变研究及认知分析》,浙江大学博士学位论文。
- 刘善涛·李敏 2010.〈副词“反正”的产生和发展〉,《汉字文化》第2期, pp.42-26。
- 吕叔湘主编 1999.《现代汉语八百词》(增订本),商务印书馆。
- 吕为光 2015.〈迟疑功能话语标记“怎么说呢”〉,《汉语学报》第3期, pp.87-94。
- 马真 2016.《现代汉语虚词研究方法论》(修订本),商务印书馆。
- 孙嘉铭、石定栩 2021.〈反素副词的意义构成与句法功能—以“早晚”“大小”“反正”为例〉,《华文教学与研究》第1期, pp.24-31。
- 太田辰夫 1991.江蓝生·白维国译,《汉语史通考》,重庆出版社。
- 王瑶 2018.〈结论性语用标记“反正”用法研究〉,《海外华文教育》第5期, pp.31-41。
- 张谊生 2004.《现代汉语副词探索》,学林出版社。
- 张渊 2016.〈“反正”的词汇化过程及其对对外汉语教学的意义〉,《东莞理工学院学报》第6期, pp.46-50。
- 宗守云·高晓霞 1999.〈“反正”的语篇功能〉,《张家口师专学报》第1期, pp.15-20。
- Haiman, John 1980. The iconicity of grammar. *Language* 56:515-540.
- Haiman, John 1983. Iconic and economic motivation. *Language* 59:781-819.
- Heine, B., Claudi, U., and Hnnemeyer, F.1991. *Grammaticalization: a conceptual framework*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Schiffrin, D. 1987. *Discourse markers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Traugott, E. C. & R. B. Dasher 2002. *Regularity in Semantic Change*. Cambridge University Press.
- Traugott, E. C. 2003. From subjectification to Intersubjectification, in Raymond (ed.), pp.124-139。